



京都府京丹後市

～お茶を京丹後市の基幹産業にすることを 目指して～

ふくきのうえんかぶしがいしゃ
福喜農園株式会社

WEB サイト：<http://www.matsumura-s.jp/index.html>

参入法人の概要

法人形態：農地所有適格法人

代表者名：代表取締役 松村 竹治

所在地：京都府京丹後市峰山町赤坂 555 番地

設立年次：平成 18 年 7 月

資本金：900 万円

親会社：松村産業株式会社

営農形態：土地利用型（にんじんは露地栽培）

主要作物：茶、にんじん

経営面積：約 32.7ha（うち借入 32.7a）

主な販売先：全農京都を通じて宇治の茶商

売上額：非公表

従業員：常勤 4 名

●農業に参入した目的を教えてください

松村産業株式会社は、土木工事一式を行う建設会社であり、代表取締役は、父親から譲り受けた 2 代目です。2 代目として、これまで事業を順調に進めてこられたのは、地域に認められて存続できてきたという思いが強く、地域に対する恩返しをしたいとの思いに加え、本業である建設業において、公共事業を含む工事受注が減少してきたため、端境期に出来る事業を模索していたところ、京都府と京丹後市から、お茶の生産について提案を受け、丹後地域の基幹産業の 1 つになれば良いという夢を抱いて、友人らと共に新たに福喜農園株式会社を設立しました。

●当該作物を選んだ理由を教えてください

京都府と京丹後市から提案を受けたこともありますが、農業参入した当時は、京丹後市の国営開発農地で生産されていた葉たばこが、需要低迷による生産量の減産が続いている傾向にあり、他方で、加工食品の品質表示基準の改正で、緑茶が原料原産地表示の対象に追加されたことを機に、宇治茶の原料となる京都府産の茶の増産が実需者から求められていたという背景もあり、お茶の生産を始めることとなりました。

●参入にあたって栽培技術面等の課題にどのように対応されましたか

京丹後市からお茶を生産することについて相談を受けたのは、代表取締役と酪農経営をしている同級生の 2 人でしたが、織物業の傍ら農業をしていた友人、施設園芸をしていた知人にも声を掛けて 4 人で当該会社を設立しました。

4 人ともお茶の栽培経験が無く、その中の茶園の実務担当が、参入前に京都府宇治田原町の茶園へ勉強に出向き、参入後の栽培技術等は京都府の丹後農業改良普及センターからの指導を仰ぎました。



福喜農園の茶園の様子

●販売先、販路についてはどのように確保されましたか

お茶の栽培を始めるに当たり、苗木を宇治市の茶業会議所から調達しました。

当社の茶園で収穫した茶葉は当初、京都府綾部市の製茶工場に持ち込んで荒茶に仕上げ、全農

を通じて市場に出荷していました。

ところが、栽培面積を拡大していった結果、綾部市の製茶工場の荷受け数量をオーバーしたことから、以後、更に生産数量が増えた際にも対応できるよう、京丹後市、JA、当社を含むお茶の生産者らが共同出資して、京丹後市内に製茶工場を平成 22 年に建築しました。

●農業参入してみて気づいた（参入するまで気づかなかった）のはどのようなことですか

お茶は、植えてから 2～3 年すれば、ある程度の収入があるものと思って始めましたが、5～6 年間は茶葉を収穫することが出来ずに収入が無い状態が続きました。

更に、それ以降においても天候や病害虫により、被害を受けることもありました。お茶の収穫は一年間のうち限られた時期となっていることから、相当手厚い対策が必要であり、ずっと気が抜けません。

肥料に関しても、自分の本業は建設業で産廃処理の許可もあるので、山の木をチップにすることや、一緒に会社を立ち上げた者は酪農をしているので、それで堆肥が出来ると考えていたものの、お茶は肥料を多く施用しないと美味しいものが出来ないということで、有機肥料だけでは不足することから、化学肥料等で補給する必要もあり、肥料の代金が負担になりました。

●地域の方や農業委員会、JA、自治体との関係について気を付けていることがあれば教えてください

茶園の国営団地における草刈り作業には、積極的に参加しています。

また、農業参入から数年後、京丹後市地域でお茶を作っている生産者たちと京丹後市茶生産組合を立ち上げました。お茶の生産に使う化学肥料は J A から購入し、生産したお茶は一貫して全農を通じて出荷。平成 22 年の製茶工場の建設時には、J A や京丹後市と当社を含む茶農家が共同出資し、平成 29 年には、茶農家と京丹後市、京丹後製茶（株）とで「京丹後茶 GAP 推進協議会」を設立し、その翌年には、J G A P 認証を取得する等、地域の同業者や関係機関と良好な関係を築いています。

なお、今は京丹後市の農業振興を図るために組織された京丹後市農業経営者会議に当社も参画しています。

京丹後市における茶の生産については、京丹後市茶生産組合を立ち上げた際に「目指せ 100ha」という目標を掲げ取り組んでいます。京都府や京丹後市が側面支援いただいており、我々がその期待を担っていると自負していますので、その信頼に応えられるように頑張っています。

●今後の経営方針について教えてください

お茶は植えて（苗木）から摘採できるまで 5～6 年掛かりますが、これまで規模拡大してきた茶園の木が成木になったので、今後は全ての茶園から収穫が望めることから、安定した売り上げを期待しているところです。

一方で、丹後地域は、毎年霜害がひどく、令和 4 年は一番茶の 75%が霜の被害に遭ったことから、令和 5 年に防霜ファンを設置しました。

令和 6 年は気候に恵まれ、防霜ファンを稼働することなく、霜害を受けず、今までにない収穫量となりましたが、今後は、防霜ファンを設置した効果が発揮され、収穫量の安定に寄与してくれるものと思っています。



福喜農園の乗用型茶摘採機

●今後、農業参入しようと考えている企業へのメッセージをお願いします

農業には、収穫の楽しみがあります。良いものが出来れば、喜びも味わえますが、逆に天候により被害を受けると、そうでない時もあります。

農産物（お茶）の栽培を簡単に考えていたことは猛省すべき点で、異業種からの参入だったことに加えて、生産に取り組んだ丹後地域における気象条件や土壌条件などのノウハウもなく苦労しましたので、そうした面の下調べは重要ではないかと思います。

なお、京丹後市でお茶の生産をしてみようという人がおられましたら、サポートさせていただきますので、是非お声掛けください。



京丹後市産のお茶